カタツムリ帝国

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カタツムリ帝国

【Ｎコード】
Ｎ３４３０Ｌ

【作者名】
源雪風

【あらすじ】
エスカルゴを愛するカタツムリ帝国の王子の、エスカルゴとの愛のモノガタリ

カタツムリ帝国の王子は、変わり者でした。
王子はいつも、肩にエスカルゴのゲマイネを載せています。
王子は、厳しい性格で政治をきっちり取り行っています。
王子の笑顔は、だあれも見たことがありません。

しかし、王子はエスカルゴと二人っきりになると人が変わります。
もうデレデレになってしまうのです。
王子の人生の唯一の楽しみは、自分の体のあっちこっちに愛するエスカルゴを這わせることです。
その気持ちのいいこと！
王子は脱力したようにソファーに横たわります。

そんな二人の愛の時間を、こっそり見ていたものがおります。
その名もマリリアンヌ。
嫉妬深い、王子のいいなずけです。
「許せないわ。わたくしの王子を汚すなんて！」
マリリアンヌの目は、嫉妬の炎でめらめら燃えています。
「今に見てらっしゃい！」
さあ大変です。
きっとマリリアンヌは恐ろしいことを起こすに違いありません。

事件は、エスカルゴの食事のときに起こりました。
エスカルゴが、大好物の豆乳を飲んでいた、その時です。
エスカルゴの様子がみるみるうちにおかしくなるではありませんか！
目がしましま模様になって、右往左往しています。
マリリアンヌの悪だくみが、今実行されてしまったのです。

すぐに獣医さんがかけつけました。
王子は心配で、そわそわよろよろしています。
「王子様のエスカルゴ様は、寄生虫に取りつかれておいでです。」
「何いっ！」
王子は、目を白黒させました。
「おそらく食事に寄生虫が紛れていたのでしょう。」

豆乳は、庭に生えている大豆を細かく砕いて作っています。
もし豆の時点で寄生虫が入っていたのなら、一緒に砕かれて死んでいたことでしょう。
しかし、豆乳は入っていたとなると、何者かが悪意を持って入れたか、偶然飛んできた、もしくは歩いて入ったと考えられます。
しかし、エスカルゴに取りついた寄生虫は、移動能力は持ちません。
ということは豆乳に虫が投入されたのです。
城内はたちまち犯人探しで大忙しになりました。

王子はつきっきりでエスカルゴの看病をしました。
「ああ、我のかわいいゲマイネよ。元に戻っておくれ。ああ、ああ。」
獣医はよろける王子をそっと支えて言いました。
「このままでは、寄生虫に操られて、エスカルゴ様は自殺してしまいます。」
「おお、獣医よ。我がゲマイネを救い給え。」
王子は涙をぼろぼろこぼしておねがいします。
「一か八かですが、一つだけ方法があります。」

大広間に、王子の部下が集められました。
一世一代の荒療治が行われようとしています。
王子は柄にもなく
「ああ、神様、ブタ様、仏様。」

と言って、お祈りしています。
すると獣医が何かを取り出しました。
その場にいた者は目を疑いました。
何と虫下しです。

なるほど、寄生虫を虫下しで退治するのでしょう。
しかしそれではエスカルゴも虫ですから、ゲマイネも死んでしまうではありませんか！

しかし王子は、あきらめたのか最早余裕の笑みを浮かべて
「これで大丈夫だ。」
と、つぶやいています。
本当に大丈夫なのでしょうか。

虫下しは、ゲマイネお気に入りの豆乳に混ぜられました。
もし、ゲマイネがこの豆乳を飲まなければ、全てが水の泡です。
大広間にいる全員が、ゲマイネを見守ります。
しかし心配はいりませんでした。
ゲマイネはゆるゆると豆乳に近づいて、ゆっくりゆっくり飲んでいます。
でも、ほっとしてはいられません。
寄生虫は死んでくれるでしょうか。

ゲマイネが１０分ほど豆乳を飲んだ時です。
ゲマイネの目が見る見るうちに元に戻ってゆきました。
ゲマイネは見事、寄生虫に打ち勝ったのです。

その場にいた人々は、喜びのあまり、踊りだしたり、声にならない雄たけびを上げたり、抱き合ったりしています。

問題はこの後です。
寄生虫に勝てても、ゲマイネは虫下しに負けてしまうかもしれません。
一同は唾をごくりと飲みます。

何ということでしょう。
ゲマイネは倒れてしまいました。
王子の部下は一斉に王子の顔色をうかがいました。
しかし、王子は微笑んでいます。
これは一体どういうことでしょう。
王子のゲマイネへの愛は、消えてしまったのでしょうか。

部下たちが驚きのあまり固まってしまっている中、王子は王冠の宝石を一つ取り、ゲマイネに当てました。
王家に伝わる不思議な力が宿った伝説の宝石です。
すると、宝石から世にも不思議な光が・・・出たりせずに、ゲマイネが再び動き出したではありませんか。
その瞬間、お城中が喜びの声でいっぱいになったのは言うまでもありません。

しかし、ただ一人マリリアンヌは、くやしそうに舌打ちをしています。
彼女のことですからきっとまた、何かしでかすに違いありません。

ほっとしたのもつかの間、またもや事件が起こってしまいます。
王子のそばから片時も離れなかったゲマイネが、行方知れずになってしまったのです。

王子のうろたえようといったら、目も当たられません。
ゲマイネはどこに行ってしまったのでしょう。

ゲマイネは、コンクリートの壁に囲まれた、真っ黒な空間にいました。
犯人のマリリアンヌは、エスカルゴ相手に何か言っています。
「ふふふ。わたくしの王子様に手出しいた罰ですわ。ここで一人寂しく餓死しなさい。」
何と酷い女でしょう。
小さくてか弱い、可憐なエスカルゴを、部屋に閉じ込めて殺してしまおうというのです。
王子様、早くゲマイネのピンチに気付いて、助けてあげてください。

しかし、無情にも月日は過ぎて、六か月が経ってしまいました。
王子は心配のあまり、体調を崩して、寝込んでいます。
うなされながら何度も何度も愛しいエスカルゴの名を呼んでいます。

すると、その想いが通じたのか、額に懐かしいぬめぬめを感じます。
「まさか、ああ、帰ってきてくれたのか。ずっと待っていたのだぞ。」
王子はしばし、目を開けてゲマイネの帰還を確認するのをためらいました。
もし、ゲマイネでなかったら・・・。
そう考えると怖くなります。

それでも、王子は決心します。
目をゆっくり開くと、そこには懐かしい二本の角。
「ゲマイネ！」
王子は飛び起きて、喜びに狂います。

それにしても、どうやってゲマイネは帰ってきたのでしょう。
よく見るとゲマイネの口は、コンクリートの粉だらけです。

カタツムリは、殻を作る為に、コンクリートを好んで食べます。
ゲマイネは、三か月かけてコンクリートの壁を食べました。
すると、ちょうどゲマイネが出入りできる大きさの穴があいたのです。
穴を通って外に出た後、帰巣本能で三カ月かけて王子の元へ帰ってきたのです。

辛い旅だったようで、殻には獣の爪痕。
体は泥だらけ。
力を使い果たしたのか、王子の額の上でぐったりと眠っています。
安心した王子も、六か月ぶりにぐっすりと眠ります。

王子とエスカルゴではありますが、互いを思いやる気持ちが通じ合ったのです。

それを知ったマリリアンヌは、鬼のような形相で八つ当たりしたそうです。

ある昼、王子は鷹狩りにゲマイネを連れて行きました。
そこでまたもやゲマイネは悪事に巻き込まれてしまいます。

王子がちょっと目を離したすきに、ゲマイネがいなくなりました。
王子はすぐに鷹狩りを中止にして、部下にゲマイネの行方を捜させました。

すぐにゲマイネは見つかりました。
しかしゲマイネの身には危険が迫っています。
何とゲマイネは剣だらけの落とし穴にいるのです。
穴を囲んで、王子と部下はゲマイネを助けようと手を尽くします。
王子は狩りの為に連れてきた鷹のたーちゃんに、ゲマイネを助けさ

せようとしました。
でも、剣が危なくて近づくこともできません。
投げ縄の名人の縄も、長い棒も、剣に邪魔されて届きません。

ゲマイネはさぞ痛がっているだろうと思って、王子がじっくりゲマイネを見てみると、不思議なことに全く平気なようです。
やせ我慢しているのかと、もっと注意深く見てみましたが、血一滴出ておらず無傷です。
助けることが出来ない以上、見守るしかありません。
辺りが夕焼けのオレンジ色に包まれたころ、ゲマイネは無事生還しました。

さて、ゲマイネが助かったのは、奇跡・・・ではありません。
エスカルゴの体はぬるぬるしているため、剣の上を歩いても、ぬるぬるのおかげで体が傷つかないのです。
びっくりしましたね。

その後、犯人探しの為に、落とし穴を念入りに調べたところ、すごい手がかりが見つかりました。
剣から、マリリアンヌの部下の指紋がいくつも出てきたのです。

マリリアンヌを疑った王子の部下たちは、前回のゲマイネ失踪事件も、マリリアンヌが引き起こしたのだと思いました。
ゲマイネの這ってきたぬるぬるが、わずかに残っていたので、犬に匂いを嗅がせてたどって行きました。
するとどうでしょう。
マリリアンヌの城の地下物置に着いたのです。

マリリアンヌを取り調べると、誘導尋問にあっさり乗っかり、きれいさっぱり自白しました。

お嬢様は逆境に弱いのです。

王子は誰も見たことのないほどの本気で怒って、マリリアンヌとのいいなずけの契約を取り消しました。

よかったですね。

エスカルゴをいじめるような人にろくなやつはいませんからね。

というわけで、邪魔ものもいなくなり、王子とエスカルゴはいつまでもぬめぬめと暮らしましたとさ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3430l/

カタツムリ帝国

2010年10月21日12時48分発行